

単刀直言

特別編

訪れたのは、東京・日比谷公園内にある「日比谷松本楼」。静かな木立に囲まれた同店は、明治36年に創業した日本を代表する洋食店だ。

山谷えり子拉致問題担当相の明るさはどこから来ているのか。名刺には、国家公安委員長、海洋政策・領土問題、国土強靱化、防災担当…と数々の役職が並んでいるが、山谷さんは「仕事と思わない。『生き方』よ」とサラリと答える。3児を育てながら国家や家族の大切さを骨太に追求した半生は、今や北朝鮮による日本人拉致問題の再調査でも強力な武器となりつつある。老舗洋食店で山谷さんの力の源泉に迫ってみた。(水内茂幸)

「35歳のとき、この店でサンケイリビング新聞社の幹部から『編集長になってほしい』と頼まれました。当時おなかには3人目の赤ちゃんがいますね。出産当日も原稿を書いています」

山谷さんが、窓越しに浮かぶ深緑を見ながらニコニコと振り返る。

サンケイリビングは、主婦向け週刊フリーペーパーの草分け的存在。山谷さんは、時に幼いお子さんを会社の会議室で遊ばせたりしながら、働いたという。

「日々頑張っている主婦の皆さんにハッピーになってもらいたい、毎週企画を考えていましたね。フリーマーケットやハロウィンなんて珍しかった時代に、はやらせたり、主婦の再就職に焦点をあてて『新卒用の履歴書しかないのはおかしい』と提言してみたり」

前菜の「長崎ホワイトアスパラのグリエ」「五島の天然真鯛と海の幸のメドレ」が運ばれてきた。松本

山谷えり子 拉致問題担当相

「主婦の短時間勤務 充実させたい」

梅屋庄吉が長崎県出身という縁で、長崎産の食材がふんだんに登場する。アスパラも地元農家からの直送品で、驚くほど甘みが強い。

子育てしながらキャリアを積み、今の安倍政権が掲げる「女性活躍社会」を先取りしているようですね。

「『キャリアを積み』とか『子育てと両立』など考えたことはないんですよ。私は小学生時代から新聞を作っていて、いわばそのノリの延長なんです。新聞記者だった父の背中をまね『えりちゃん新聞』を作った。

「夏の間から秋の初め」とされた最初の報告予定が年明け、春になり。北朝鮮は今月2日、日本側に協議停止を示唆する通知まで送りつけた。

「拉致解決しなければ国家でない」

「5月の連休に米ニューヨークを訪れ、北朝鮮の人権と拉致問題の解決を訴えます。北は『人権』という言葉に敏感です。かつての東ドイツやソビエトは『情報(流入)』と『人権』問題が体制崩壊の一因になった。

「日本は拉致問題が最優先、他の回答は評価しない」という姿勢を貫きます。ただこれまで長く閉じていた北朝鮮との扉が安倍政権のもとで開いたのも事実。ここで解決しなければ、日本は国家たりえないという強い気持ちで臨んでいます」

「私は専門主婦時代に多くの拉致の疑いが十分濃厚」と答弁しても、国内の問題意識が広がらない。国家主権を奪われた占領時代に生まれた私は、『これは



長崎産カサゴを使った魚料理に舌鼓を打ちつつ、家族の大切さを説く山谷えり子拉致問題担当相
東京・日比谷公園の「日比谷松本楼」(酒巻俊介撮影)

【日比谷松本楼】東京都千代田区日比谷公園1の2。☎03・3503・1451。営業時間は午前11時～午後10時(3階ボア・ド・ブローニュ)。無休(年末年始は休み)。

「家族政策については最近気になる動きがある。専業主婦世帯などの所得税負担を軽減する『配偶者控除』の見直し論だ。主婦が働く時間を自制しないよう、自国民内でも廃止論がある。政府が女性の働きやすい環境を整えるのは大賛成。ただ、3児を育てる専業主婦のわが妻をみていると、家庭の子育てにも価値を認めてほしいのですが…」

「私は専門主婦時代に多くの拉致の疑いが十分濃厚」と答弁しても、国内の問題意識が広がらない。国家主権を奪われた占領時代に生まれた私は、『これは

「もっといい洋服がほしい、もっといいおうちに住みたい、『もっともっと』となれば家族と向き合う時間が減っていく。『家族の中で愛を感じなければ、誰も人を愛する』という気持ちが育たないでしょう」と。最近その価値がなかなか伝わらないようにも感じていますよね」

(22日昼に「産経ニュー」で詳細版を掲載します)